

龍樹造・中論無畏疏 (前續)

寺本婉雅譯

「觀如來品」第二十二 (Tathāgata-parikṣā)

第六 章

此に問て言く (p. 94c), 諸法は自性あるのみなり。如來應供正等覺者、一切世間の主、一切世間の遍照者、教師、教住者の在すが如し。

此に釋して曰、

(1) 蘊に非ず、蘊より異なるに非ず

そこに蘊なく、そこに彼なし

如來は蘊を具するにあらず

如何なる如來ありや。」

「非陰、不離陰

「諸蘊に非ず諸蘊より異に非ず

此彼不相在

此の中に諸蘊に於て如來なし

//Phuñ-Mlin Phuñ-po-las gShan-Mlin/

//De-La Phuñ-Med Der De-Med/

//De-Shin-gÇegs-pa Phuñ-l-dan-Mlin/

//De-bShin-gÇegs-pa Gan-Shig-Yin/

//Skandhā na nānyah skandhebhyo

na-asmin skandhā na tesu sat/

如來不有陰

如來は諸蘊を有するに非ず

Tathāgataḥ skandhavan na

何處有^⑤如來。」

そは如何なる如來あらんや。」

Katamo'tra tathāgataḥ// (p. 432)

/Nicht Körper, nicht von Körper verschieden, in ihm ist nicht Körper, nicht jener in diesem,

Der Tathāgata ist nicht mit Körper behaftet: welcher ist da Tathāgata?// (p. 133)

若し此處に如來と名けらる或ものあらば彼は諸蘊なりや、將た諸蘊より異なりや、彼の中に諸蘊ありや、五蘊の中に彼ありや、彼に諸蘊を具することありやと計慮するとき、そは只如來は五蘊に非ず、若し五蘊ならば生(Upāda, hByuṇi-ba, 發生)と滅(Bhaṅga, hJig-pa, 破壞)との法を具するが故に無常と取(Upādāna)とに墮す、是の如きことあらず。それ故に如來は諸蘊に非ず、如來はまた諸蘊より異なるに非ず。若し如來は諸蘊より異なるに非ざれば、生と滅との法を具するに非ざるが故に常等の過失に墮すべし。異なれば眼等の諸根に由て執せらること有るべしと知るも、是の如きこと非るが故に、それ故に如來は諸蘊より異に非ず、如來の中に諸蘊有ることなし、若し如來の中に諸蘊有るならば、如何に雪(山)中に藥(草)と乳の中に黒蜂とある如く(p. 95a)、彼の中に異なる諸蘊を明かに縁すべし、異性ならば先示の過失となるが故に、是の如きことあらず。それ故に如來の中に諸蘊あることなし、諸蘊の中に如來有らば、如何に他の家の中に婆羅門と狗兒の跳舞あり、鉢中に乳あるが如く、諸蘊中に如來を明かに縁すべし、異性ならば先示の過失となるが故に是の如きことなし、

それ故に諸蘊中に如來有ることなし、如來は諸蘊を具することなし。若し如來は諸蘊を具するならば、應に牛を所有し、寶を所有する如く、彼の中に異の諸蘊を明かに緣すべし、異性ならば先示の過失となるが故に、是の如きことなし、この故に如來は諸蘊を有せず。

是の如く五種を以て求むるに、彼の有ることなき如來は何ぞや。それ故に諸存在 (D.Nos-po. 物・事) は(自性)あるのみなり。如來の存するが如しと云へる彼の説明は正しからず。

① 般若燈論——「非_レ陰 不_レ離_レ陰、陰如來互無、非_レ如來有_レ陰、何等是如來。」

中觀釋論——「即_レ蘊無_レ如來、異_レ蘊無_レ如來、如來無諸蘊、何處有_レ如來。」

異部宗輪論——犢子部の根本義——「補特伽羅非_レ即_レ蘊、離_レ蘊、依_レ蘊、處、界假_レ施名。」

部宗異論——「非_レ即_レ五陰是人、非_レ異_レ五陰是人、攝_レ陰人_レ故、立_レ人等假_レ故。」

十八部論——「非_レ即_レ是人、亦非_レ離_レ陰界、入_レ和合_レ施設故。」

西藏譯——「諸蘊は補特伽羅 (puṅgala, Gan-Zas) に非ず、蘊と處とに能依して施設す。」

② 本偈——/Phun-Min Phun-Po-Tas gShan-Min /蘊に非ず、蓋より異なるに非ず(今は此文に據て譯出す。

本疏 Sku-Min Sku-Tas gShan-Ma-Yin / (身に非ず、身より異なるに非ず)——梵文と漢譯等に依りて此偈疏文を用ひず、本偈文を用ひたり。

③ 本疏——Sku (身)、本偈——Phun (蘊) に據る。④ は③と同様なり。

⑤ 獨譯——/Nicht Körper, nicht von Körper verschieden. (身體に非ず、身體より異なるに非ず)——Walliser 氏

は此の本疏の Sku-Min (身に非ず)云々の文に依て譯せり。

此に問て言く、是等如來の觀察に由て求むるに無なりと云へども、諸蘊に依て假施せらるること

有るなり。

此に釋して曰、

(2) 「若し佛は蘊に於て

/Gal-te Sais-Rgyas Phui-po-la/

能依して(有るも)自性よりなし。」

/bRten-Nas N-Bo-Ñid-Ias Med/

「陰合有_ぎ如來

「若し諸蘊を取りてあるも

//Buddhah skandhan upādāya

則無有自性。」 自性より存在するに非ず」

yadi nāsti svabhāvataḥ/ (p. 43b)

/Wenn der Buddha abhängig (upādāya) von den skandhas ist, ist er nicht an sich (svabhāvataḥ) / (p. 134)

若も如來は蘊に能依して施設せらるべしと謂ふも、偕て今是の如く自性より有ることなし。

此に問て言く。そは自性より有ることなきも、我他の自性より有るなり。(p. 95b)。

此に釋して曰、

(2) 「自性より何ものもなし、

//No-Bo-Ñid-Ias Grui-Med-pa/

他(性)より何處にかあらん。」

/De-g-Shan No-Bo-Ias Ga-Ia-Yod//

「若無有自性、

「その自性より存在するものが

/Svabhāvataḥ ca yo nāsti

云何因他有」 如何そ他性よりあるか。

Kutah sa parabhāvatah // (p. 436)

/Was nicht an sich (svabhāvatah) existiert, woher sollte das von anderem Sein (abhängig) existieren. // (p. 134)

若し自性より何ものも無ならば、そは他性より何處にかあらん。何の故に云ふや、かの他性に於て又自性なきが故に、而して對治(Gegen-po)なきが故に、他性は認むべからざるが故に、この故にかの自性なき所有の如來は、何が故に他性より有らんや。

① 般若燈論——「因陰、有_二如來_一、即無有_二自體_一。」

中觀釋論——「若無有_二自體_一、云何有_二他體_一。」

② 本偈——/bRen-Na Ran-Byun-Las Yad-Min/ (能依せば自生より存ることなし。)

③ 般若燈論——「若無_二自體_一者、云何因_二他有_一。」

中觀釋論——「彼他體既無、何有_二人等相_一。」

④ 本偈——/Rai-bShin-Ias-Ni Gai-Med-pa/ (自性によつては何ものもなし。)/ Rai-bShin = prakriti. (本性)

⑤ 本疏——gShan-dNos は gShan-Nos-Bo (parabhāva) とあるべき處を七字宛一句の偈文に字餘りを來たすこととなるからして、No-Bo の二緩字の代りに dNos 一字を以て代用せしたものであらうか。或は自性(Svabhāva, No-Bo) に對する他性の原語は gShan-dNos を以て parabhāva の對譯としたものであらうか。蓋し dNos 又は dNos-Bo (Dhāva, vastu) は存在・物・事を證はす字なるも No-Bo (svabhāva) は an sich sien (自性) を證はす語である。

此に問て言く。そは他となれる取 (Upādāna) に能依して施設せられず。

此に釋して曰、

(3) ①「何ものか他性に能依して(有るもは)

そは我性を認むべからず。」

// Gan-Shig gShan-Gi-dNos bRten-Nas/ ②

/De-bDag-Nid-Du Mi-hThad-Do/

「法若因他生、

「他性に緣つゝあるは、

//Pratitya parabhāvain yahi

是即爲非我。」

非我なりと生ず。」

so'ñātmety upapadyate/(p. 437)

/Was von anderem Sein abhängig ist, des ist nicht als „Selbst (ātman)“ angängig/(p.435)

何ものか他性に能依して施設せらる其は、我性 (bDag-Nid) 然らざること認めむべからず。何故に云ふや、自らに由て成せざるが故なり。

(3) ③「何ものか、かの我性なきものは

如何ぞ如來となるぞ。」

// Ji-I-tar De-bShin-gÇe-gs-par-hGyur//

「若法非我者、

「非我なるものは

/Yaç ca anātmā sa ca kathāni

云何是如來。」

如何ぞ如來となるぞ。」

bhaviṣyati tathāgatah// (p. 437)

/Was nicht selbst ist, wie sollte das Tathāgata sein ?//

何ものか、かの自の我性なき如來は、そは他となれる取に能依して施設せらるゝが故に、如ぞ如

來となり得るや。

- ① 般若燈論——「法從他緣起、有_レ我者不_レ然、若無_レ有_レ我者、云何有_レ如來。」
中觀釋論——「若法因他有、彼無體可_レ生、無體故無性、云何有_レ如來。」
- ② 本疏——dNos-pa は No-Bo (自性) の誤りか。

復又

- (4) 「若し自性なければ
如何ぞ他性あらんや。」
//Gal-te No-Bo-Ñid Med-Na/
//gShan-dNos Yod-par Ji-Jar-hGyur/

「若無有_レ自性、
如何にして他性あらんや。」
//Yadi nästi svabhāvaḥ ca
prabhāvaḥ kathan bhavet/(p. 437)

/Wenn nicht Selbstsein (svabhāva) existiert, wie sollte Anderssein (parabhāva) existieren?//
(p. 135)

若し如來に自性なければ、それは如何ぞ他性あらんや。それなくば如來は他性に能依して成ずること
も亦有ることなし。

- ① 本偶——/Gal-te Ran-bShin Yod-Min-Na/(若しも自性有るに非ざれば)。Ran-bShin = prakṛti (本生・數論
哲學の語)

② 本疏——*d'Nos*は*No-Bo*の意に解代せしたものであらうか。

此に問て言く、

如來の自性は法定して執すべからざるも、尙存在するが故に如來は成すべし。

此に釋して曰、

(4) 「自性と他性等とを
① /*No-Bo-Nid* *Dai* *gShan* *d'Nos-Dag* /

除いて誰か、かの如來あらん。」
/ *Ma-g* *Togs* *De-bShin-g* *Cogs* *De-Gain* //

「離自性、他性、」 「自性と他性とな離れん」
/ *Svabhāva-parabhāvābhyaṃ*

何名爲_二如來_一。」 誰か彼の如來あらん。」
/ *ite* *kañ* *sa* *tathāgatañ* // (p. 437)

/ *War* *ist* *dieser* *Tathāgata* *ohne* *Eigensein* *und* *ohne* *Anderssein* ? / (p. 135)

自性と他性とを除いて誰か、かの如來あらん。誰に由ても施設せらるゝ他のもの有ることなし。

① 本偈——/ *Rai-bShin* *Dai-Ni* *gShan* *d'Nos-Dag* / (自性と他性等 句)——*Rai-bShin* = *praktiti*.

② 本疏——*d'Nos-Dag* は *No-Bo-Dag* の意の代解なるか。

③ 中觀釋論——「何處有_二如來_一。」

此に問て言く。

如來は諸(五)蘊に能依して施設せらるゝものなり。そは其者とも他者なりとも言はれざるが故に、諸蘊の自性も亦あらず、他の自性も亦あらず。

此に釋して曰、

(5)「若し蘊に能依せずして

或る如來あらば

そは今初めに依りつゝ

能依して其れに由て(取る)べし。」

「若不_レ因_レ五陰

先有_レ如來者

以_レ今受_レ陰故

則說爲_レ如來。」

//Gal-te Phun-po Ma-bRten-par/

/De-bShir-gCegs-pa hGah Yod-Na/

/De-Ni Da-gDod Rten-ñGyur-Shin/

/bRten-Nas De-I-as bGyur-I-a-Rag//

//Skandhān yady anupādāya

bhavet kaccit tathāgatah/

Sa idānim upādadyād

upādāya tato bhavet// (p. 438)

/Wenn unabhängig von den skandhas irgendein Tathāgata wäre,

So würde er jetzt erst annehmen und davon abhängig (upādāya) sein.// (p. 136)

若し此に如來あらず、如來の諸蘊に能依して施設せらるものなりと計量せば、若しそこに如來あらず、そはそれに依ることは無意義なり。されど如來あらず、斯くては若し又諸蘊に能依せざる前に於

て、他の如來に由て住する或るものあらば、今初めに諸蘊に依りつゝ能依して、是れに由て如來となるべし。

① 般若燈論——「彼未取陰前、已有非如來、而今取陰故、如是如來耶。」

中觀釋論——此四句缺。

② 本偈——(De-Ni Da-gZod Ren-kyur-Shin/gZod=gDod 二者同意 The first

③ 本疏——De-La. 今は本偈 De-La に據る。

此に釋して曰、

(6) 「諸蘊に能依せずして

或如來も亦なし

如何ぞ能依せずして存せざるものが

それに由て如何ぞ近取せん。」

① 「今實不受陰 而して亦諸蘊を受けずして

更無如來法 如何なる如來も存せず

若以不受無 (諸蘊を)受けずして存せざるものが

今當如何受。」 如何ぞ(諸蘊を)受へんや。

//Phui-po Rnams-La Ma-hRten-par/

/De-bShin-gCegs-pa hGah Yan-Med/

/Gan-Shig Ma-bRten Yod-Min-pa/

/Des-Ni Ji-Lter Ñer-I-en-hGyur//

//Skandhān cāpy anupādāya

nāsti kaçcit tathāgatah/

Yaç ca nāsty anupādāya

sa upādasyate kathañ// (p. 438)

/Unabhängig von skandhas existiert nicht irgendwelcher Tathāgata;

Wer nicht abhängig existiert, wie sollte der annehmen? (p. 136)

諸蘊に能依せずして或る如來は亦認むべからず、凡そ諸蘊に能依せずして有ることなし。そは如何ぞ諸蘊を近取せん。如來あらざるが故に。例へば其れより異なるが如し。

① 中觀釋論——「可名未取蘊、自體無別體、異蘊亦無取、何得有如來。」

此に問て言、

輪廻に始と終なきが故に、如來も亦其者とも他者とも言はざるが故に、取者 (Len-pa-po) と所取 (Ne-bar Blan-ba) とに前後なきが故に、其等に能依して施設せらるものなり。(p. 96b)

此に釋して曰、

(7) 「能取も有らず

// Ne-bar-Blans-pa Ma-Yin-pa/

所取に於て何を(受くるを)えず

/Ne-bar Len-par Cir-Mi-hgyur/

所取なきところの

/Ne-bar-Len-pa Med-pa-Yi/

如來は何ものも亦なし」

/De-bShin-gCegs-pa Ci-Yan-Med/

「若其未^①有受」

// Na bhavaty anupādādatam

「未だ能取もあらず

所受不名受

如何なる所取も受るなし

upādānaṃ ca kiṃ cana/

無有無受法

取を離れたるところの

Na caṣṭi nirupādānaḥ

而名爲如來。」

如來は如何にしてもなし。」

kaṭṭhāni caṇa taṭṭhāgataḥ// (p. 439)

/Ohne Angenommenes (anupādattam) ist nicht irgendwelches Annehmen (upādāna).

Ohne Annehmen ist auch nicht irgendwie Tathāgata/(p. 136)

若し輪廻に始と終なきが故に、取者と所取とに前後あることは認むべからざれば、如來は取者なるが故に。諸(五)蘊は所取なりと云ふ、そは認むべからず。何の故に云ふならば、此に所取あるが故に、取と云へるを能取するが故に。取者なりと云はゞ、輪廻は始と終なきが故に、是は取なり、是は能取なりと云ふ、其等は認むべからざるが故に、取者に由て所取はあらず。又取とはならず、取なくば亦取者は如來なりと云ふべからざるが故なり。

① 中觀釋論——此四句一偈を缺。

此に問て言、

如來は有るのみなり、取に由て施設せらるゝが故なり。

此に釋して曰、

(8) 「五種を求めらるゝとあり

//Rnam-pa Lhas-Ni bTsal-Byas-Na/

誰か其者^①と異者とに於て

/Gai-Shig De-Ñid gShan-Ñid-Du/

無なる彼の如來は

/Med-pahi De-bShin-gCegs-pa De/

如何ぞ取に由て施設せられん。」

/Ñe-bar-I'en-pas Ji-I'tar gDags/

「若於一異中

「其者と異別とによつて

//Tattva-anyattvāna yo nāsti

如來不可得

五種に求められつゝあるところの

mnyigyamānaḥ ca pahcahā/

五種求亦無

彼の如來が

Upadānena sa kathāni

云何受中有。」

如何ぞ取に由て施設せられん。」

prajñapyatē tathāgatah// (p. 439)

/Wer, wenn auch fünffach gesucht, nicht als eben derselbe und nicht als ein anderer existiert,

Wie wird dieser Tathāgata durch Annehmen (upādāna) erkannt? (p. 137)

若し此處に如來は取に由て施設せらるゝものあらば、そは取に由て其者か若は異者となるべきし
計慮するならば、五種に由て推求するに誰か其者と異者とに於て無なるところの彼の如來は、取に
よりて如何ぞ施設せられん。それ故に、それ又正しからず。

① 本疏——/De-Ñid gShan-Ñid/(其者、他者)

漢譯——一異。一性異性。梵文 Tattva-anyattavāna (同一と異別と)。

此に問て言、

取者は有るのみにして、所取あるが故なり。

此に釋して曰、

(9) 「如何なるかの所取も

そは自性よりなし。」

// Gran-Shig Ñe-par-Bhāi-ba De/

/De-Ni^① No-Bo-Ñid-Las Med/

「又所受五陰^②

「亦此の取なるところの

// Yad apidāni upādānāni

不從自性有」

其者は自性よりは存せず。」

tat svabhāvān na vidyāte/

/Was Annehmer ist, das existiert nicht an sich (svabhāvataḥ)/(p. 137)

かの取はありと思惟せらるゝ其れは、亦緣起 (Kten-Chi-bGrel-par-ñi-Bryūi-ba) の故に自性 (p. 97a)

より有ることなし。

① 本偈——Ran-Shin (prakṛit)本性。

② 中觀釋論——「此如是所取、自性無所有。」

此に問て言、

かの所取は自性より有ることなきも、亦他性より有るなり。

此に釋して、

(9) 「自性より何ものもなきものなほ」 /bDag-Gi dNos-I as Trai-Med-pa/ ①

そは決して他性より有らず。」 /De-gChan-dNos-I as Yod Re-Skan/ ②

「若無自性」者 「自性より存せざるものなほ」 /Svabhāvatag ca yan nāsti

云何有他性」 如何ぞそれは他性よりあらん /kutas tat parabhāvatatāḥ// (p. 440)

/Was nicht von eigenem Sein existiert, das existiert niemals von anderem Sein/(p. 137)

凡そ所取は自性^④よりなきものは、そは決して他性より有ることなし。何故に云ふならば、自性あるに非ざるが故に、他性も亦なきが故なり。 ①②③④本疏 dNos-po (物、存生 yastu)

又釋して曰、

我 (bDag) と云ふは能依 (bRten) して有り、五種の前に取なし、如何ぞ能依せざる取は決して有るを得ん。彼の取も亦、かの取の前に所取あることなければ、如何ぞ取は有るをえん。取は彼の所取に於て能依あるなし。能依せざるものなし。取は所取よりあらず、所取なきものより有ることなし。所取に於て取あらず、取のあらずして、そは取の能依なし、取なきに所依あらず、取を能成する凡てのものは、所取よりあるならば、そは能成なくば取の能成は如何ぞ有るを得ん。若し取を能成するところの所取は成せざれば、取は成することなきが故に、所取の能依なし。

(10)「是の如く所取と能取とは

//De-I-tar Ner-Blai Ner-I-en-pa/

一切種に由て空なり

/Rnam-pa kun-Gyis Stoi-pa-Yin/

空の故に、空なる如來は

/Stoi-pas De-bShin-g-Cegs Stoi-pa/

如何ぞ施設せられん。」

//Ji-I-ta-Bur-Na h-Dogs-par-h(Gyur//

「以_レ如是義

「是の如く取と取者とは

//E'vain cūnyam upādānam

受空、受者空

一切の處に於て空なり

upādātā ca saavacāh/(p. 440)

云何當以_レ空

而して空に由て空なる如來は

Prajñapyate ca cūnyena

而說空_ニ如來。」

如何ぞ施設せられん。」

kathāni cūnyas tathāgatah// (p. 441)

/So ist Angenommenes (upādāna) und Annahmer (upādāty) ganz und par (sarvaśah) leer.

Wie wird aber durch Ieeres ein leerer Tathāgata erkannt/(p. 138)

是の如く何が故とならば、所取と取者とは自性と他性と、其者と異性等は一切種に由て空なり、

此の故に第一義(諦)のみを見るものは、是の如き所取と取者との分別に由て、如來は有るなりと施

設するを得ず。かるが故に能依によりて施設せらるゝが爲めに、一切種は空性なるが故に、自性と

他性と其者と異者等なりと説かるゝことなし。

此に問て言、

然らば今空なりと云ふ、そは決定なりや否、此處に曰、

(11)「空なりと亦説くべからず

//Stoi-No Shes Kyan Mi-bjod-De/

不空なりとも亦説くべからず

/Mi-Stoi Shes-Kyan Mi-Bya-Shii/

二と不二とも説くべからず、

/g'Nis Dai g'Nis-Min Mi-Bya-Ste/

設設の爲めに説かれるなり。」

/g'Dags-pahi Don-du bRjod-par-Bya//

「空則不可説

「空なりとも説くべからず

//gūnyam iti na vaktavyam

非空不可説

若は不空なりとも説くべからず

aśūnyam iti vā bhavet/

共不共叵説

二者と不二者とも然り

ubhayain na-ubhayain ceti

但以假名説

假説の爲めに説かれるなり。」

prajñāpṭy arthain tu kathyate// (p. 444)

/„Leer“ soll man nicht sagen, „nicht leer“ soll man nicht sagen,

Beides und nicht-beides nicht; zum Zwecke des Erkennens (nur) ist es zu sagen/ (p. 139)

空なりとも亦説くべからず。不空なりとも亦説くべからず。空も亦あらず。不空も亦あらずとも亦説くべからず。不相應の宗のみを除きて破せんが爲めなり。非如實(妄虚)分別の垢を淨めんが爲めに、

第一義(正義)の眞如を施設せんが爲めに、其等を説くべきなり。

① 本偈——*Ston-No She-Ni* (p. 98a) (空なりとは)

此に問て言、

若し如來は自性と他性とより亦有ることなくば、何の故に常と無常等と、邊と無邊等を説くことあらざるぞ。

此に釋して曰、

(12) 「常と無常等の四

此の寂靜は何處にかあらん

邊と無邊等の四

此の寂靜は何處にかあらん。」

「寂滅相中無

常無常等四

寂滅相中無

邊無邊等四。」

//Rtag Dan Mi-Rtag la-Sgogs bShi/

/Shi-ba hDi-la Ga-la-Yod/

/mThah Dan mThah-Med I-a-Sogs-bShi/

/Shi-ba hDi-la Ga-la-Yod/

/cācavata-acācavataḍy atra

kutaḥ gānte catuṣṭayāni/

Anta-anantādi cāpy atra

如何にして寂滅の中にかあらんぞ。」 *kutaḥ gānte catuṣṭayāni* (p. 446)

/Wie wären ewig, nicht ewig usw., (diese) vier in diesem Beruhigten (santa)?

Wie waren die vier, Ende, Nicht-Ende usw in diesem Beruhigten ?/(p. 139)

如來は自性に由て不生なり、此の寂靜中に常と非常と亦非常とに於て、常にも亦非ず、非常にも亦非ずと云へる前の邊に能依する四見と、有邊と無邊と、有邊も亦有り、無(邊)も亦無し、有邊にも亦非ず、無邊にも亦非ずと云はる後邊に能依する是等の四見は何處にか有らん。第一義(正)に於て如來は不生なるが故なり。

① 般若燈論——「無常等四過」

此に問て曰、

如來は(す)有るのみなり。涅槃の後に無なりとは授記し給はざるが故なり。

此に釋して曰、

(13)「誰に由ても深執を持しうるものな

そは涅槃に於て

如來有りと、或は

無しと了別し、了別せしむ。」

//Gaṅ-Gis hDsin-Stug bZur-Gyur-ba/

/De-Ni Mya-Nān--hDas-pa-Ia/

/De-bShin-gCegs-pa Yod Ce Hām/

/Med Ces Rnam-Rtog Rtog-par-Byed//

「邪見深厚者」^① 「如何なる人々に付し」

//Yena graho gñhiṭṭas tu

則說無_二如來_一

は深厚なる執着が執せられる彼

ghano 'stīti taṭṭagataḥ/

如來寂滅相

如來が有りとし、無しと分別

Nāstīti sa vikalpayan

分別有亦非。」

涅槃者に付ても亦(有無を)分別するであらう。

nirvīṭasyāpi kalpayet// (p. 1447)

/Wer massiges Greifen faßt, der mag sich/

/Taṭṭagata im nirvāṇa als „seinend“ oder als „nicht-seiend“ vorstellen/ (p. 139)

種々等の分別をなし、習氣(bāsānā, Baḥ-Chaḥs)に由て修習(bSgom-pa)せらる彼の智者に由て、是は眞なるも、他は無義なりと思惟する彼の深執を持するものは、涅槃に於て如來は涅槃の後に無なりと、或は如來は涅槃の後に有も亦有り、無も亦無しと、或は如來は涅槃の後に亦有に非ず、亦無にも非らずと云はれ、涅槃に依る四見を分別に於て分別す。

① 般若燈論——「麤重執見者、說_二如來有無_一、如來滅度後、云何不_二分別_一。」

中觀釋論——「顛倒分別習、無執中生執、若如來本無、即無_二分別因_一。」

② 本偈——/Gai-Gis De-bShin-gQeḡs Yod Qes/(誰に由ても如來有りと)

/ñDsin-pa Sng-po gZan-Gyur-ba/ (深執を持するものは)

(14) 「かの自性に由て空なる中に

佛は涅槃して後ち

或は有り、或は無しと

思惟は認むるを得ず。」

① 如是性空中

「而して自性より空なるをよきは

// Svabhāvataḥ ca gūnye 'smiṅc

思惟亦不可

滅後の後ち(佛)は有り、

cintā natva-upapadyate/

如來滅度後

或は無しとの

Paraiṅ nirodhād bhavati

分別於有無。」

思惟は有り得ず。」

buddho na bhavati vā// (p. 447)

/Bei diesem von sich aus (svabhāvataḥ) Lernen ist der Gedanke (cintā)

„ Buddha existiert nach dem nirvāna, “ existiert nicht “ nicht zutreffend. / (p. 140)

正慧眼を開けるものに涅槃に於て、如來は涅槃の後に有りと、或は如來は涅槃の後になしと、或は如來は涅槃の後に有も亦有り、無も亦無しと、或は如來は涅槃の後に亦有に非ず、亦無に非ずと、涅槃に依れる其等の四見の思惟は認むるを得ず。分別の意は無境に生じ得ざるなり。

① 般若燈論——「如來自體空、不應起思惟、滅後有_二如來、及無有_二如來。」

中觀釋論——「如來自體空、思惟不可有、云何謂如來、滅後有與無。」

② 本偈——/Ran-Dshin-Gyis-Ni Ston De-La/(自性に由ては彼の空の中に)

(15)「あらゆる佛は戲論を脱し

無盡の(佛)に於て戲論をなし

戲論に由て害せらる彼一切に由ては

如來を見るを得ず。」

//Grni-Dag Sais-Rgyas Spros hDas-Cin/

/Zad-pa-Med-Ia Spros-Byed-pa/

/Spros-pas Nams-pa De-kun-Gyis/

/De-Shin-gCegs mThon Mi-hGyur/

①「如來過戲論 戲論を脱して

//Prapançayanti ye buddhan

而人生戲論

不滅なる佛な戲論するもの

prapañca-atitam avyayan/

戲論破慧論

戲論に由て害せらる彼等の總ては

Te prapañca-hatañ sarve

是皆不見佛。」

如來を見るを得ず。」 na paçyanti tathāgatañ// (p. 448)

/Diejenigen, welche den jenseits der Entfaltung befindlichen unvergänglichen (avyaya) Buddha

entfalten,

Schauen nicht, durch Entfaltung verletzt (hata), den Tathāgata/ (p. 140)

あらゆる佛世尊は戲論よりも脱し、無盡に於て有と無と常と不常と色身と法身と説法と相と所相

と因と果と覺と所證と空と不空等の戲論 (Prapañca, Spross-pa) によりて戲論し、慧眼を損害せる彼等一切は、生盲の日に(對する)如く、如來は戲論より脱し、無盡の法身を見るをえず。

① 般若燈論——「戲論生ニ分別、如來過ニ分別、爲ニ戲論ニ所覆、不能見ニ如來。」
中觀釋論——「佛已過ニ戲論、能破ニ諸戲論、戲論所覆者、彼不見ニ如來。」

(16) 「彼の如來の自性は

そは有情の自性なり

如來の自性はなし

此の有情の自性なし。」

「如來所有性^④

即是世間性

如來無有性

世間亦無性。」^⑤

/Was des Tathāgata Wesen (svabhāva) ist, das ist das Wesen der Lebewesen (jagat, cig. des Gehenden):

「彼の如來の自性は

此の世間の自性なり

如來は自性を離るゝが故に

それ故に此の世間は自性を離る。」^⑥

//De-bShin-gÇegs-paḥi Ran-bShin Gan/^①

/De-Ni hGro-bahi No-Bo-Nīd/^②

/De-bShin-gÇegs-pa Ran-bShi Med/^③

/hGro hDi-Yi Ran-bShin-Med//

//Tathagato yat svabhāvas

tat svabhāvam idanī jagat/(p. 448)^④

Tathagato niḥsvabhāvo

niḥsvabhāvam idanī jagat/(p. 449)^⑤

Des Tathāgata Wesen existiert nicht, dieses Lebende (jagat) ist ohne Wesen// (p. 141)

何に由ての故に、是の如く虚妄分別 (parikalpa, Yoṁsu-bRtags) するに、彼の如來は自性なきが故に、如來の自性の彼の凡てのものは、是等有情と行有情 (行世間) の自性も亦有り。如來の自性とは何ぞや。

釋して曰、

彼の如來の自性なし、此等の有情も亦無自性に等しと雖も、功德の平等にはあらず。

- ① ② 本疏の dños Nid (物事) は本偈 Rañ-bShin 本性 (svabhāva, 自性)、漢譯自性とあり、今是に據る。
- ③ 本疏の No-Bo-Nid (svabhāva) は本偈に Rañ-bShin (本性) とあり、今は此の本偈四句に據る。
- ④ 般若燈論——「以_二如來自體、同_二世間自體、如來無體故、世間亦無體。」
中觀釋論——「彼如來自體、即世間自體、如來體不成、世間亦無體。」
漢譯——世間、梵——jagat (有情世間)、藏文——kGro (有情)。
- ⑥ 獨譯——Wesen (實體、實在、本質) を以て Svabhāva (自性) に對譯せるは妥當ならず、第 (2) 偈の獨譯の如く svabhāva は an sich に對譯するを可とすべし。

「阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中道無畏疏内」、「觀如來」と名けられて、第二十二品
たつ」(De-bShin-gCogs-pa bRtag-pa Shes-Bya-Ba-Sre, Rab-Tu-Byed-pa Ni-Cu-gNis-Paho)